



みどり



128号『頭痛①』

2018年11月1日発行／編集責任者 田中 眞／毎月1日発行／群馬県藤岡市篠塚105-1
<http://www.shinozuka-hp.or.jp/center/>

今月から2回にわたり「頭痛」について解説します。

頭痛の種類、分類

頭痛は身近な症状ではありますが、その原因は多岐に渡ります。頭痛を大まかに分類すると表1のようになります。

表1. いろいろな頭痛

★慢性頭痛；繰り返し起こる頭痛

- ・いわゆる「頭痛もち」の頭痛
- ・「片頭痛」, 「緊張型頭痛」などがある
- ・特徴的な症状から診断され、頭痛自体が治療の対象となる

★頭痛を起こす病態や疾患による頭痛

- ・原因となる病態、疾患の治療が必要

【緊急性の低い疾患】

例) 感冒などの感染症や飲酒

【緊急性の高い疾患】

例) 頭蓋内疾患；クモ膜下出血、脳出血など

「頭痛」とひとことでいっても、日常的に起り慌てずに対処できるものから、早期の医療機関受診が必要なものもあります。頭痛の症状や経過を把握することが正しい診断への第一歩となります。医療機関を受診した際に聞かれる代表的な項目を表2に示します。

表2. 頭痛の問診

- 頭痛はいつから始まりましたか？
- これまでもそのような頭痛はありましたか？
- 頭痛の頻度は？
- どんなふうに、どこが痛みますか？
- 頭痛のほかに症状がありますか？
- 現在飲んでいるお薬は？

以上のような問診から把握される、緊急性を要する頭痛の特徴を表3に示します。

表3. 緊急性の高い頭痛

- 今まで経験したことがない頭痛
- いつもと違う頭痛
- 突然の激しい頭痛
- 痛みが急に強くなる
- 回を重ねるごとに痛みが強くなる
- 50歳以降に初発した頭痛
- 発熱を伴う頭痛
- 手足のしびれや精神症状、けいれんを伴う

* * *

正式な頭痛の診断は、国際頭痛分類の病名および診断基準に則って行われます。表4にその一部を紹介します。



表4. 頭痛の分類

★一次性頭痛

□片頭痛

□緊張型頭痛

□三叉神経・自律神経性頭痛

など

★二次性頭痛

□頭頸部外傷・傷害による頭痛

□頭頸部血管障害による頭痛

□非血管性頭蓋内疾患による頭痛

□物質またはその離脱による頭痛

□感染症による頭痛

など

※各項目は更に詳細な病名に分類されます

(国際頭痛分類第3版 beta版)

一次性頭痛は頭痛そのものの症状の特徴から診断される頭痛です(慢性頭痛の多くがここに分類されます)。二次性頭痛は頭痛を起こす病因によって分類される頭痛です。頭痛患者において一次性頭痛が約9割で、二次性頭痛は1割程度と少ないです。しかし二次性頭痛には、早急な診断と治療を要する頭痛が多く含まれています。

以下に、二次性頭痛の原因となる代表的かつ緊急性の高い疾患を解説します。

くも膜下出血

くも膜下出血は、脳動脈瘤の破裂等で脳血管が破れ、脳表のくも膜下腔に出血する疾患です。

頭痛の性状は「雷が落ちたような」とか「バットで殴られたような」などと表現される、今まで経験したことがないような激しい頭痛で、意識レベルが低下することも珍しくありません。しかし出血量が少ないと、項部、頸部や肩こりといった症状のみで頭痛がないこともあります。

* * *

“くも膜”は、脳実質を保護する髄膜の一つです。髄膜は脳実質に近い方から、軟膜、くも

膜、硬膜の三層からなります。軟膜とくも膜の間が“くも膜下腔”で、脳表の血管が走行しています。

脳出血

脳出血は、脳実質内を走行する脳動脈が破れて出血する疾患です。頭痛のほかに、麻痺やしびれなどの神経症状を伴います。

髄膜炎

ウイルスや細菌の感染により起こります。感染経路は多くの場合飛沫感染で、原因病原体が上気道あるいは呼吸器感染病巣を経由して血行性に髄膜に感染して炎症を起こします。多くは頭痛に加えて発熱を伴い、進行すると意識障害やけいれんなどの神経症状も認められます。

ウイルス性髄膜炎に対しては対症療法が行なわれ、一般的に経過は良好です。一方、細菌性髄膜炎は重症化することが多く、早期診断と適切な抗菌薬の早期投与が重要です。

脳腫瘍

頭全体あるいは一部に圧迫感、頭重感が続き、嘔吐やけいれん発作などの神経症状を伴うようなときに疑われます。症状は特に起床時に強いことが多く、起床後は軽減する傾向にあります。

脳動脈解離

動脈の三層の壁(内膜、中膜、外膜)のうち、内膜に亀裂が生じて血液が入り込み、動脈壁が避けてしまう状態を動脈解離といいます。交通事故などの外傷が契機になることや、日常生活で首をひねって起こることがあります。項部から後頭部の急激な痛みが特徴です。

慢性硬膜下血腫

頭部外傷後、硬膜下に少量の出血が持続することによって血腫が形成された状態です。外傷直後は無症状ですが、一ヶ月後頃から症状を呈するようになるのが特徴です。

(文責：金子 由夏)